



# ガザ危機と世界・日本の岐路

報告：栗田禎子(千葉大学)

2024年2月12日

# 報告のポイント（考えてみたい点）

★過去4か月の展開から見えてきたこと

問題の本質 = 占領、植民地主義

★国際法違反の戦争を容認・支援する先進諸国の責任

★変わりつつある世界の潮流

★日本のとるべき道は？

★希望のありか

国際法の役割発揮、市民の運動….

# はじめに：いま起きていること

無差別攻撃、侵攻による市民の殺戮

(7割が子ども、女性)

病院・学校、難民キャンプ等への攻撃

住民の9割近くが住居を失い、避難民化

生活条件の破壊、衛生状況悪化、飢餓の危険…

「ジェノサイド（集団殺害）の典型例」ともされる事態に

# I 暴き出された問題の本質

○ 「**占領**」の問題であること

(対等なもの同士の「戦争」ではない)

## **占領者 ⇔ 被占領者の関係**

- ヨルダン川西岸、ガザ = 1967年 (第三次中東戦争) 以来イスラエルが占領下に置いてきた地域
- 入植地建設や「分離壁」建設 (= 西岸)、  
「封鎖」政策 (= ガザ) の対象に。 (「天井なき監獄」)

○イスラエルという国、（およびそれを支える）  
「シオニズム」というイデオロギーの性格

**植民地主義**の歴史の中で成立した国家  
（イギリス帝国→アメリカ、の後ろ盾のもと）

**人種主義**的性格

（かつての南アフリカの「アパルトヘイト」との共通性）  
→「ジェノサイド」的行動様式の根源…

# II イスラエルを支える「先進諸国」（特にアメリカ）の責任

## 国際法違反の戦争に対する先進諸国の支持・容認姿勢

（米による武器供与・軍事支援；安保理での「拒否権」行使

G7もイスラエルの「自衛権」支持を強調；反戦デモ規制…）

- ・ **イスラエルが域内で果たして来た役割**（cf.帝国主義の「前哨基地」）
- ・ **米国の対中東戦争（アフガン戦争、イラク戦争）のミニチュア版としての側面**（※「対テロ戦争」の名の下に国際法違反、国連無視の戦争を強行）

## イスラエルの行動を全力で擁護し、守り抜こうとする姿勢

現代世界において先進諸国が中東等にしかける国際法無視の戦争の最強の「駆動装置」=シオニズムであることを示す

（cf.「反ユダヤ主義」というレッテル貼りの欺瞞、明らかに）

### III 変わり始めた世界の潮流

- **アジア・アフリカ・ラテンアメリカ**等を中心に「即時停戦」の声（← **植民地支配や占領、人種主義的抑圧の経験**）；  
南アフリカによるICJ提訴（「ジェノサイド条約」違反）
- **欧米や日本の市民・青年**も問題の本質に気づき、停戦を求める声を上げ始める（← **「新自由主義」下での格差・貧困、戦争の矛盾**を経験。「ブラック・ライブズ・マター」等との連続性）

国連での投票行動等にも影響

**占領終結、「民族自決権」実現を求める国際世論**が形成され始める

## IV 追い詰められた「戦争推進勢力」は…

「戦争推進勢力」（先進諸国＋イスラエル）による反撃：

○「テロとのたたかい」宣伝

○UNRWAへの資金拠出停止（⇔「ジェノサイド防止のためのすべての措置」を求めるICJ命令に違反）、

UNRWA自体の解体をめざす動き

（⇒パレスチナ「難民」問題自体の消滅をめざす）

○「イランの脅威」宣伝と、

イエメン、イラク、シリア、レバノン等への（「親イラン勢力」対策を口実とする）攻撃、戦線拡大

（＝軍事的にはマイナスなはずだが）、問題の本質の隠蔽を狙う



## V わかれ道——ガザ危機と日本の岐路

○日本は

- ・米国の「対テロ戦争」支持→「安保法制」（2015）「安保関連三文書」により**米国の軍事・外交政策と一体化、軍拡路線**を歩みつつあるが；
- ・パレスチナ問題については良識ある外交を展開した実績も。

○今回の危機をめぐるは：

- ・「テロ」という表現の使用、「自衛権」への言及；米英のイエメン攻撃等への「理解」表明（cf. 「シーレーン防衛」）
- ・UNRWAへの資金拠出停止決定への追随、等の否定的傾向と ⇔
- ・国連での投票行動の変化（停戦「反対」「棄権」から賛成へ）

等の積極面が入り混じっている状況

←**鍵を握るのは市民の運動**（市民、NGO等の働きかけの有効性；

cf. 日本商社とイスラエル軍事企業との提携を中止させた青年の力）

**孤立しつつある「戦争推進」陣営にしがみつくなのか、世界の新しい動きに加わるか？**

ご清聴ありがとうございました